

専門スキルとビジネススキルの両方が 社会人としての成長を促す

専門学校 東京スクール・オブ・ビジネス (渋谷区)

編集者やショップ販売員など、学生の目指す職業はさまざま。学生一人一人が専門知識の学習を深める一方、ビジネス系検定の指導を共通に行い、基本的なビジネススキルの習得を目指している。

長年ビジネス系検定指導の取り組みに力を入れる、専門学校 東京スクール・オブ・ビジネスに話を伺った。

代々木駅すぐ近くに建つ
専門学校 東京スクール・オブ・ビジネス



どんな職業でも 社会人基礎力は必須

JR新宿駅から一駅。代々木駅を出るとすぐ「専門学校 東京スクール・オブ・ビジネス」の看板が目に見え込んでくる。オフィス街の真ん中に建つ校舎は、地下2階から地上9階建てのメタリックなビル。エントランスは吹き抜けて太陽の光が差し、外観とは対照的に、温かい雰囲気で訪れる人を迎えてくれる。

同校は、商業実務の専門学校として1967年に創立された。経営学科・経営総合学科を始め、マスコミ・広報学科、スポーツ・ビジネス学科など、全9学科を設置。約1000人の学生が専門分野の知識や技術を学んでいる。

浅川英文学校長は、同校の教育の基本方針についてこう語る。

「商業実務校として、学生が希望する仕事に就けるように、専門分野の知識や技術を教えます。しかし、どんな職業に就いても、組織

の中で臨機応変な対応や振る舞

い方がうまくできなければ、専

門の知識や技術を発揮すること

はできません。私たちは、卒業

までに、社会人としての基本的

なマナーを習得させることを前

提に職業教育を行っています。

この考え方は、創立当初から変

わらずに続いています。」

同校では、基本的なマナーを身に付けさせる

ために「ビジネスコミュニケーション」の授業

にビジネス系検定を導入している。全学科の1

年生が対象だ。毎年、ビジネス文書検定は約

300人、ビジネス実務マナー検定は約150

人、秘書検定では約100人が受験し、合格率

はいずれも高い。昨年度は、ビジネス実務マ

ナー検定で、成績優秀校に贈られる「文部科学

大臣賞」を受賞した(26ページ参照)。

「ビジネスコミュニケーション」で、ビジネス

実務マナー検定を中心に指導している坂本幸恵

先生に話を伺った。

「専門職とはいえ、当校ではほとんどの学生が

企業に就職します。そのため、ビジネスマナー

など基本的なビジネス実務能力は、しっかりと身

に付けさせなければなりません。高校を卒業し

たばかりの学生が多く、敬語の使い方や組織の

中での上下関係などの知識を十分に持っていま

せん。ビジネス実務マナー検定の学習を通し

て、自分たちにはどんな知識が不足しているの

か自覚させています。」

坂本先生が言うように、同校では社会人経験

がない10代の学生が約6割を占める。自分の働

く姿をイメージできない学生たちに、坂本先生

は「ビジネス実務能力はインターンシップで絶

対に必要な」と身近な目標を示し、勉強の

きっかけを作っている。

同校でインターンシップを取り入れたのは10

年以上前だ。1年生の春休みに全員、希望職種



マスコミ・広報学科の
実習の様子



浅川英文学校長



スポーツビジネス学科2年生の金子洋介さんと
マスコミ・広報学科2年生の渡辺千智さん



「ビジネスコミュニケーション」
でビジネス系検定を指導する
坂本幸恵先生

の企業のインターンシップに参加する。受け入れ先は、一般企業、出版社、スポーツショップ、ホテルなど多彩だ。近年はさらに、長年の企業とのつながりを生かして産学協同プログラムにも取り組み、川崎フロンターレやアミノアップ科学などと連携し、企業のイベント運営や商品企画に参加させている。これらのインターンシップでは学生は即戦力として受け入れられ、社員と同様に扱われるため、社会人としての基本的なマナーやビジネススキルが必要とされる。坂本先生は、「以前、インターンシップ先の企業から『学生の態度が悪い』と注意を受けたことがあります。やはり、社会に出て働くためには、基本的なビジネススキルの習得は絶対に必要なのだと思いました」とその重要性を強調する。

インターンシップで 学んだことを発揮する

インターンシップに参加した学生は、ビジネスマナーの知識を習得することについて、どのように感じているのだろうか。スポーツビジネス学科とマスコミ・広報学科の学生に感想を聞いた。

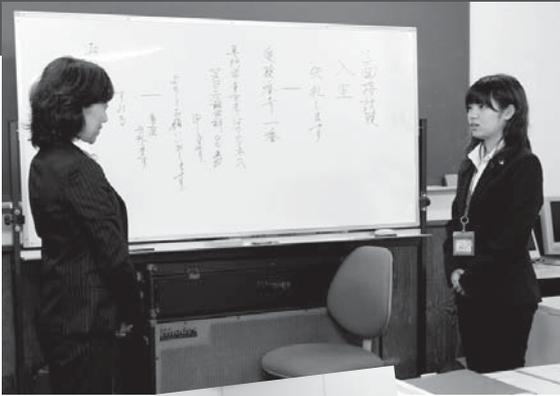
スノーボードの販売アドバイザーを目指す、スポーツビジネス学科2年生の金子洋介さんは昨年、ビジネス実務マナー検定とビジネス文書検定の3級に合格した。「『ビジネスコミュニケーション』の授業を受けてから、尊敬語と謙

讓語を取り違えて使っていたり、自分の敬語の使い方が間違っていたことに気が付きました。今年の春休みに北海道のスキー場にインターンシップに行きましたが、言葉遣いや基本的なマナーは一通り学んでいたもので、失礼のない対応ができたと思います。インターンシップ先にお礼状を出したときも、ビジネス文書検定で基本的な書類作成の仕方を学んでいたで、全く苦になりませんでした」とインターンシップでの体験を振り返る。

「専門の知識とビジネスマナーを身に付け、将来は『この人に任せておけば大丈夫』とお客さまに頼りにされるような販売アドバイザーになりたいです」と金子さんは将来の抱負を語る。

出版業界を目指すマスコミ・広報学科2年の渡辺千智さんも、秘書検定2級、ビジネス文書検定とビジネス実務マナー検定3級を取得した。「1カ月間、出版社のインターンシップに参加しました。電話応対や郵便物の発送の業務を体験しながら、編集現場で働く方々を見て、とても勉強になりました。皆さん忙しいですから、説明抜きで『これ、速達でお願い』『これ、書留で出して』と頼まれることが多かったのですが、『はい、分かりました』と即答でき、素早く対応ができてうれしかったです。秘書検定で学んだ郵便の知識が役に立ちました」と渡辺さん。気働きができると評価され、現在は出版社でアルバイトで働いている。

「今は『アルバイトでもここまでできる』と



秘書検定準1級の
面接指導



就職対策指導の授業

思っていただけのように、学んだことを生かしていきたくです。次は、秘書検定準1級試験にチャレンジしようと思っています」と、渡辺さんは上級資格の取得にも前向きだ。

インターンシップを終えた学生の反応を見て、坂本先生はビジネス系検定学習の意義をあらためて感じている。

「敬語の使い方や郵便の知識を勉強しているときの学生は、どのように役に立つのか、この時点ではまだ理解しきれいていません。インターンシップに参加し、実際に仕事を体験してみると、ビジネススキルの必要性を実感するようです。ビジネス系検定の指導はしていますが、授業で学んだことがすぐに身に付くわけではありません。インターンシップ先で実際に電話対応

をするとなれば、失敗することも多いと思います。しかし、適切な電話対応の仕方は知識として持っているだけで、注意されたときに、自分の行動を振り返ることができません。どこがどう間違っていたのか自分自身で分析し、同じ失敗を繰り返さなくなります。これが、ビジネス系検定を学ぶよさなのだと思います」。

コミュニケーション能力を 徹底的に身に付けさせる

同校では今年度から「ビジネスコミュニケーション」をさらに発展させ、ロールプレイングとグループワークを取り入れた新しい授業をスタートさせる。狙いは「就職・自立ができる学生の育成」である。グループワークなど、学生同士が触れ合う機会を増やし、自主性やコミュニケーション能力を身に付けさせたいという。

授業の柱は二つある。

一つは名刺交換や電話のかけ方などを練習するロールプレイング。昨年度までは「ビジネスコミュニケーション」の授業の中で行っていたが、今年から独立させた。徹底的にビジネススキルを習得させることが目的だ。もう一つは、5人一組になり学生同士で意見を出し合うグループワーク。他者と関わりながら、共通の目標を成し遂げていく大切さを学んでいく。学校がこの授業を取り入れるきっかけについて、坂本先生はこう話す。

「最近の学生は、初対面の人や目上の人と話す



産学共同プログラム。
企画から参加し
学生自ら接客も体験する



ことに強い苦手意識を持っているようです。そのため就職をする前に、コミュニケーション能力を徹底的に身に付けようと、この授業を開設しました。学生たちにはコミュニケーションの大切さを、実技を通して感じてほしいと思っています」。

学生の夢を一身に支え、社会に送り出そうとする先生方の熱意が込められた活気あふれる授業になりそうだ。